

宿縁

十月号

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

浄土真宗
本願寺派
中原寺

TEL 〇四七―三七二―〇二九二
FAX 〇四七―三七二―〇二六二

無限のものに

生かされている



「心に響く五つの物語」(致知出版社)に載っていた作家・西村滋さんの少年期の話を紹介しましょう。

『少年は両親の愛情をいっぱいを受けて育てられた。殊に母親の愛情は近所の評判になるほどだった。その母親が姿を消した。庭に造られた粗末な離れ、そこに籠ったのである。結核を病んだのだった。近寄るなど周りは注意したが、母恋しさに少年は離れに近寄らずにはいられな

かった。

しかし、母親は一変していた。少年を見ると、ありったけの罵声を浴びせた。コップ、お盆、手鏡と手当たり次第に投げつける。青ざめた顔、長く乱れた髪、荒れ狂う姿は鬼だった。

少年は次第に母を憎悪するようになった。悲しみに彩られた憎悪だった。少年6歳の誕生日に母は逝った。“お母さんにお花を”と勧める家政婦のオバサンに、少年は全身で逆らい、決して柩の中を見ようとはしなかった。

少年が9歳になって程なく、父が亡くなった。やはり結核だった。その頃から少年の家出が始まる。公園やお寺が寝場所だった。公衆電話のボックスで体を二つ折りにして寝たこともある。そのたびに警察に保護された。それからの少年は施設を転々とするようになる。

13歳の時だった。少年は知多半島の少年院にいた。もういっぽしの“札付き”だった。ある日、少年に奇蹟の面会者が現れた。泣いて少年に柩の中を見せようとしたあの家政婦のオバサンだった。

オバサンはなぜ母が鬼になったのかを話した。死の床で母はオバサンに言ったのだ。“私はまもなく死にます。幼

い子が母と別れて悲しむのは、優しく愛された記憶があるからです。憎らしい母なら死んでも悲しまないでしょう。あの子が新しいお母さんに可愛がってもらうためには、死んだ母親なんか憎ませておいたほうがいいのです。そのほうがあの子は幸せになれるのです。”

オバサンは、母からは20歳になるまではと口止めされていたそうですが、そのオバサンも胃がんを患い、生きているうちに“本当のことを伝えておきたい”と、この話をしてくれたのです。

少年は話を聞いて呆然とした。自分はこのように愛されていたのか。涙がとめどもなくこぼれ落ちた。札付きが立ち直ったのはそれからである。』

私たちはいつも自分のはからいが中心です。すから眼に見えるものだけを信じて追い求めていきます。思い通りになれば幸せを感じ、思い通りにならないければ不幸と感じます。はからいが強ければ強いほどそうした自分自身の姿に気づかないのです。

西村滋さんが少年期に母の存在を否定し、すべてが思い通りにならずに自暴自棄になったのも、母親の表面だけを見、心の深い部分が見えていなかったからではないでしょうか。

西村さんが教えてくれるのは、それがそのまま私の生き方でもあります。

釈迦・弥陀は慈悲の父母
種々に善巧方便(ぜんぎょうほうべん)し
われらが無上(むじょう)の信心を

発起(ほつき)せしめたまひけり

(親鸞聖人和讃)

私に真実心が起こるのは、自分の力で起こるのではなく、お釈迦さまと阿弥陀さまが手をかえ品をかえして、私の中に真実心が起こるようにはからってくださったおかげで起こるのです。母である阿弥陀さまと父であるお釈迦さまが、子である私の知らないところで、いろんな方便(方法)をして私を仏の清浄心に気づかせたいと導いてくださったのである、と親鸞聖人は教えてくださいました。

私たちにとって何が大切かといったら、人間に生まれた意味を知り、真の喜びは何かに目を覚ますことです。私は長い間何も知らずに生きてきたけれども、阿弥陀さま(絶対に崩れぬ真実心)と真理と表現してもよい)は一念一刹那も忘れることなく私のことを思っていてくださったのだということ、命のあるうちに知らされることが「信心の喜び」であります。

世間でいうようなただ有難い有難いと自分で思っているのが信心の喜びではありません。信心とは、はつきりと自分の目が覚めることです。すべてをそのまま包み込んで助けんとする、人間のはからいを超えた阿弥陀さまの存在を疑えなくなったところの感動です。つまり、信とは私たちが本当の知、仏智というものをいただくことです。阿弥陀さまの本願に会わない人は、どれだけ、私は人生を合理的に生きています、良心的に生きていますといっても、それはお酒に酔っぱらっているような人でありましょう。

【寺灯雑記】

○秋日和のもとで彼岸会が勤まる
9/23

境内に曼珠沙華の赤や白の萩が咲いて、ほのかに秋色を感じさせる中で彼岸会法要が営まれました。

好天にも恵まれて、大勢の参詣者とともにご住職の導師で仏説阿弥陀経を誦讀しました。そして、仏教讃歌「いのち」が

♪野の花の ちいさな いのちにも

ほとけはやどる ほとけはやどる

朝影と ともにきて

つつましい つつましい

営みをあたえる

おなじように♪

と、心をこめて唱和されました。

法話は「仏教に親しむ」と題して前住さんからお話を伺いました。

その中で、釈尊のお言葉の“レットテルを貼るな！”を引きながら、「仏教は特別な堅苦しなものではなく、普段張っている肩の力が下りて楽しく広やかになるものであるから、日頃からもっと親しんでほしい。本を読むことも大事だが、聞くという場を通して意味の深さが自然と耳に入ってくるものだ。」と、仏教を取り入れた落語を紹介しながらお話されました。

○門信徒会役員会を開く

10/4

今年度の第4回定例門信徒会役員会は15名が出席して開かれました。

主な議題のうち、先月5日に9名の委員で話し合われた「ファミリーパーティー検討委

員会」第2回の会議の結果が報告され、了承されました。来年は8月2日に第24回門信徒ファミリーパーティーの開催予定です。また、子ども合宿の報告と反省点、文化講演会当日の役割分担などが話し合われました。

それから今年度からの検討課題にあがっている、門信徒会費の見直しに関する委員会を来月30日の門信徒会役員会に先立ち1時から開催することが決まりました。

○当寺を会場に千葉組の連続研修会

10/12

12項目(仏教とは、浄土真宗、差別等)について隔月で2年間にわたって学ぶ第7期千葉組北ブロックの連続研修会が当寺を会場に開かれました。

11カ寺からの受講者(当寺から6名)約60名は午後1時から4時過ぎまで今回のテーマである「平和」について熱心に学習しました。

本堂で開講式、正信偈のおつとめの後、講師の了善寺ご住職による問題提起を受けて聞法会館において「沖縄の基地問題について」のDVD教材鑑賞。さらに6班に分かれて話し合いが行われました。

ポイントとして①今の日本は平和なのか②平和とはどのような状態か③自分はそのような立場考えなのか、といったところをポイントに、それぞれが活発に意見を出しました。

仏法の学びは、決して自己の殻を固めるものではなく、つねに社会の中の私のあり方が問われることと学びました。

【ご案内】

☆第26回文化講演会

日時：十月二十五日(土)開演一時半

講師：姜尚中氏(聖学院大学学長)

総合テーマ：なにゆえいま 仏教

・講題：「心の力」

専攻は政治学、政治思想史、テレビ・新聞・雑誌などで幅広く活躍の姜尚中(カンサンジュン)先生をお迎えします。

心の力とは何か、心を病む時代にどう心を強くして生きるのかを、姜先生の苦悩の歴史を通して講演いただきます。

皆様のご来場をお待ちしています。

☆グラウンドゴルフ大会参加者募集

ゴルフとゲートボールを併せたようなスポーツの「グラウンドゴルフ」が人気急上昇らしいのですが、このたび仏教壮年会を中心にグラウンドゴルフ大会が開催されることとなりました。今回は普段からグラウンドゴルフの練習や大会を催されている松戸の天真寺さんと合同で行います。初心者のかたも経験者が丁寧に教えて頂きますし、道具もこちらで用意いたします。皆さんお気軽にご参加ください。

日時：十一月十二日(水) 一時半より

場所：松戸 天真寺

*天真寺までの送迎もいたします。

参加希望の方は今月中に中原寺までご連絡ください。

☆報恩講法要修行

十一月二十日(木)

(参道に沢山の絵灯籠の作品を展示)

五時—親鸞様と過ごす夕のコンサート

五時半—おつとめ「初夜礼讃」

引き続き—住職、前任職法話

おとき・あずき粥接待

—八時終了予定—

・十一月二十一日(金)

十一時—おつとめ「讚仏偈」

引き続き前席法話「洛陽遷化」

正午—おとき・精進料理接待

一時—おつとめ「正信偈」

引き続き後席法話「転迷開悟」

布教使：池田行信師(栃木慈願寺住職)

—三時終了予定—

☆青木新門さんと行くインド仏蹟の旅

・期日：平成二十七年一月下旬(八日間)

・旅行代金：二十六万八千円

当寺にもお馴染みの「納棺夫日記」の作家・青木新門さんと行くインド世界遺産巡り、お釈迦さまの仏蹟参拝、ベナレス河の沐浴体験を内容とする八日間の旅です。

【法座・行事案内】

○お仏具磨き奉仕 十一月八日 十時

○婦人会、壮年会合同法座 十一月八日 一時半

○浄土和讃に学ぶ 十一月二十九日三時

(十月は休座です)

【十月の掲示板のことば】

人生れて精進せずば
たとえば樹に根なきがごとし